



paper



no. 009



名和晃平 × 田根剛
(彫刻家) (建築家)



オープン北加賀屋



服部彰治 (タウンプロデューサー)
橋本裕介 (舞台芸術プロデューサー)



加藤昌和、森本康平
(Layer Zaisu Project)



名和晃平 × 田根剛

(彫刻家)

(建築家)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。9回目となる今回は、京都にある元サンドイッチ工場を創作のためのプラットフォームに変え、ジャンルを越えた活動を繰り広げる名和晃平氏、20代半ばから海外へ拠点を移し、さまざまなプロジェクトを行う田根剛氏を招き、それぞれが考える「建築と空間」についてお話いただいた。

建築は何に寄り添うか

田根：僕はフランス・パリを拠点にイタリア人とレバノン人のパートナーと設計事務所を共同主宰しています。彼らとは、エストニア国立博物館のコンペがきっかけで、仕事をはじめました。

名和：エストニア国立博物館は、どんな提案をされたんですか？

田根：エストニアは、1940年より旧ソ連に長い間占領されていて、独立して15年ほど経ったのが2005年。自国の文化的な醸成を行うため立ち上がったのが、国立博物館の新築コンペでした。僕たちは提案のためのリサーチを行い、敷地の傍らにある空軍軍基地の巨大な滑走路に目をつけました。ナショナルアイデンティティとなる国立博物館と、旧ソ連時代の負の遺産である軍用滑走路をつなぎ、ひとつの建築にする、それがコンセプトとなりました。

名和：僕も建築に携わるときは、敷地と周辺施設、同じようなプログラムがどんな時代・場所に生まれてきたのかをリサーチするようにしています。最近、僕が主宰するスタジオ「SANDWICH」に建築部門ができました。今はアートだけではなく、建築のプロジェクトも並行して行っています。ちなみに、エストニア側は作品のどんな点を評価したのでしょうか？

田根：文化大臣から「100以上の応募があり、素晴らしいデザインはたくさんあったけれども、我々の国のこの場所にしかない建築は、これしかないと思った」と講評がありました。それはまさに、自分たちが目指す建築の在り方だったので、とても嬉しかったですね。

名和：場所がもつコンテキスト——歴史や文脈をうまく作品の要素として取り入れたのですね。田根さんの作品は、そういった場所や環境に寄り添うものが多いのでしょうか？

田根：重要な要素ですが、それだけではなく、場所の概念や記憶を掘り起こしたいと思っています。そのためにもしリサーチが必要です。最近では、東京・新国立競技場のコンペにも《Kofun Stadium》という作品を提案したんですよ。古代日本最大の建造物である古墳と、

現代最大の祭典であるオリンピックをひとつの建築とするコンセプト。最終選考まで残ったのですが、実現できず残念でした。

名和：実現したところ、見たかったですね。僕はコンテキストを掘ることも大切だと考えているんですが、そこからどう飛躍させるかが重要だと思うんです。方程式みたいに答えが出てしまうよりも、少しずらしたり、ボンとジャンプしたりしてみたいんですよね。

田根：そうですね。さまざまなデータを扱っても、アイデアの飛躍をさせないと驚けないし、次に向かえないと思います。

トライアルの場となるスタジオ

名和：SANDWICHは、京都市内にある旧サンドイッチ工場跡地をリノベーションすることからはじまり、現在ではアーティストやデザイナー、建築家がコラボレートしながら創作を行う場となっています。施設内には宿泊設備もあって、国内外のクリエイターが滞在できる、非常にグローバルでオープンな雰囲気があるんです。

田根：僕の事務所もヨーロッパを中心に、アジア、南米、オーストラリアからもメンバーが集まっています。考え方も全然違うし、事務所の使い方や片付け方なども違って、まとめるのは大変ですが、この時代でしか得られない特別な感覚がある。

名和：僕もその感覚をSANDWICHで感じていますね。プロジェクトが同時に何本も走っている状況で、未だアートの方が比率は多いけれど、割いている時間は実質半々。展覧会やコミッションワークなどさまざまなオファーがあるなか、それらとはまったく自由に切り離された、新しい作品やコンセプトを発見することにかぎって注力したいと思っています。

田根：毎回、展覧会に向けて何をするか決めていくのですか？

名和：そういう場合もあります。普段から、何かひとつのアイデアがあって、そこに素材や技術が入ってくることによってプロジェクトが



どう動き、完成に至るまでどのように組み立てられるのか、常にトライアルを重ねている感覚です。SANDWICHは、そういう挑戦をしていく場所ですね。

田根：アイデアをプロジェクトに当てはめていくんですね。建築の場合は、クライアントとのやりとりなど、アートとは異なる難しさがあると思いますが、そのあたりはいかがですか？

名和：結局、建築でもアートでもそういった諸条件はあるんです。スケールも予算もあるし、その場所に設置する意味やコンテキストなども検討しなければいけないので、あまり変わらないと思います。もちろん建築の場合は、建築法などの法的な条件は多いですし、構造や人が使うための動線など細かなルールもありますね。

田根：建築は複合的なものなので、アートのようにひとつのアイデアだけでは進められない場合があるかもしれませんね。

名和：建築部門が立ち上がったばかりなので、今は自分たちの建築言語を丁寧につくっているところなんです。ただ、僕たちは今までアートを通した空間づくりをやってきて、空間に入る体験を細部までプロデュースする方法をとってきたので、その延長線上に建築があると考え、複合的にできないことはないかなと思いますね。

細胞で空間を感じる

名和：以前、建築家・西沢立衛さんとお話したなかで印象的だったのが、「空間の造形性みたいなものには、運動神経がいる」という言葉です。運動神経と言っても、走るのが速いとかではなくて、空間を意識できているか、身体で空間を測って頭のなかでグルグル回せるか、ということだと思うんですよ。

田根：目の細胞より、やっぱり身体の細胞の方が多い。だから目だけに頼らない人じゃないと空間体験をきちんととらえることは難しいですね。そこを建築家は問われる。優れた建築家ほど身体で

空間を測る能力が高いように思います。

名和：クリエイションが起こっている瞬間に会話ができる人、できない人という線引きもそうです。それは経験の差や、普段どれだけ頭のなかで空間を動かしているかの差で、若いスタッフだとすぐには難しい。SANDWICHのスタッフも、作品のディテールを何度も話し合い、細かな対話を続けていると、いつのまにか会話ができるようになってくる。“素材”、“技術”、“フィジカル”のどこの部分をコントロールするのか「名和だったらこうする」という方法論を多くのスタッフが共有してくれているんです。

田根：勝手な想像ですけど、今回作品を見させていただいて、名和さんは直感でクリエイションをされるのではないかなと。もちろん空間の細部への配慮もされつつ、鑑賞者に想像をさせる余白が残されているから、空間になじむというよりは、爆発力がある。

名和：たしかにそうかもしれません。事前に計画していたプランをもとに、今日も作品を設置してきたんですが、現場に入った瞬間、「違う！」と気づいて。現場での直感にしたがってプランをその場で変更することも多いですね。

田根：僕は、よく「建物」と「建築」の差について考えるんです。建物は設計図さえあれば建てることのできる“もの”でしかないけれど、建築は場所のコンテキストと、そこから生み出されたコンセプトによって現れる場所の概念だと思っていて。そこに建築の魅力がある。だから、“建築”には人が集まるのだと思っています。

名和晃平
Kohei Nawa

1975年生まれ。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。2000年より「Cell」の概念をもとにさまざまな素材・メディアを用いた彫刻シリーズを展開。2009年に京都で創作のためのプラットフォーム「SANDWICH」を設立。2011年、東京都現代美術館で個展「KOHEI NAWA-SYNTHESIS」を開催。

田根剛
Tsuyoshi Tane

1979年生まれ。2006年フランス・パリにDGT(DORELL, GHOTMEH, TANE / ARCHITECTS)設立、共同主宰。代表作に「エストニア国立博物館」(2016年完成予定)など。2012年よりコロンビア大学GSAPP常勤講師。http://www.dgtarchitects.com/

オープン北加賀屋 地域の出来事をひらく、伝える

おとなとこどもの 北加賀屋みんなのうえん日記

L M

みんなのうえんの大人・子どもメンバーが綴る農園の日々

夏の恵みの収穫祭！ おいしいものはよく知ってる。

Date 2014.06.29 Venue みんなのうえんカフェ



原奈緒（小学校5年生）
好きな野菜はきゅうりです。
夏はきゅうりがたくさんとれて、嬉しいです。

みんなのうえんにも色とりどりの夏がやってきました。恒例のトマトにきゅうり、夏の風物詩の枝豆にトウモロコシ。今年こそは！のスイカやズッキーニも順調。夏野菜は水やりのたびにうれしい発見をさせてくれます。そんな美味しいものを狙ってブーンブーンと忍び寄るものが……。そう、カナブンたち。心待ちにしていたもろこしを食べられる前にと、チームのみんなで夏の収穫祭をしました。狙われていたトウモロコシも甘くて格別！「甘いねー美味しいねえ」と、ともに育てた仲間と恵みを共有できる時間は、みんなのうえんならではのうれしい贅沢です。虫さんともケンカしたり分け合ったりしつつのシェア農園。おいしいものは、人も虫もよく知ってるよね。

あかいみちこ（みんなのうえんメンバー）
好きなものは、イチゴにトマトにスイカ。赤いものに目がありません。



北加賀屋のいま

B

さまざまな分野のクリエイターによる北加賀屋での活動を紹介



鳥公園ワークショップ

「書きたてほやほやの鳥公園新作
『空白の色はなにいろか？』の戯曲を
公演会場で俳優より先に読んでみる」

Date 2014.08.02 Venue クリエイティブセンター大阪(CCO)

鳥公園は今年1年かけて戯曲の制作に取り組んでいる。8月2日、その活動の一環としてワークショップが開かれた。普段何気なく見ている世界を言葉によって再発見するため、知覚の言語化を中心にWSは行われ、最終的には、実際にリーディング公演を行う会場でテキストを読み、聞こえ方をシェアした。興味深かったのは、公演を行う際、複数の条件にアクセスし、その過剰さのなかでぶれないものが戯曲として機能するという作家・西尾佳織の創作への態度だ。今、若手と呼ばれる世代の劇作家が言葉の力を問うている、そのことに未明の光を感じた。

山崎恭子

「居留守」という団体名で舞台作品を制作、現在京都造形芸術大学大学院所属舞台芸術領域専攻。ポテトサラダが好き。

◎ 素晴らしきまちかど芸術

公共空間における珍風景を巡る

ジェイソンのDIYドア

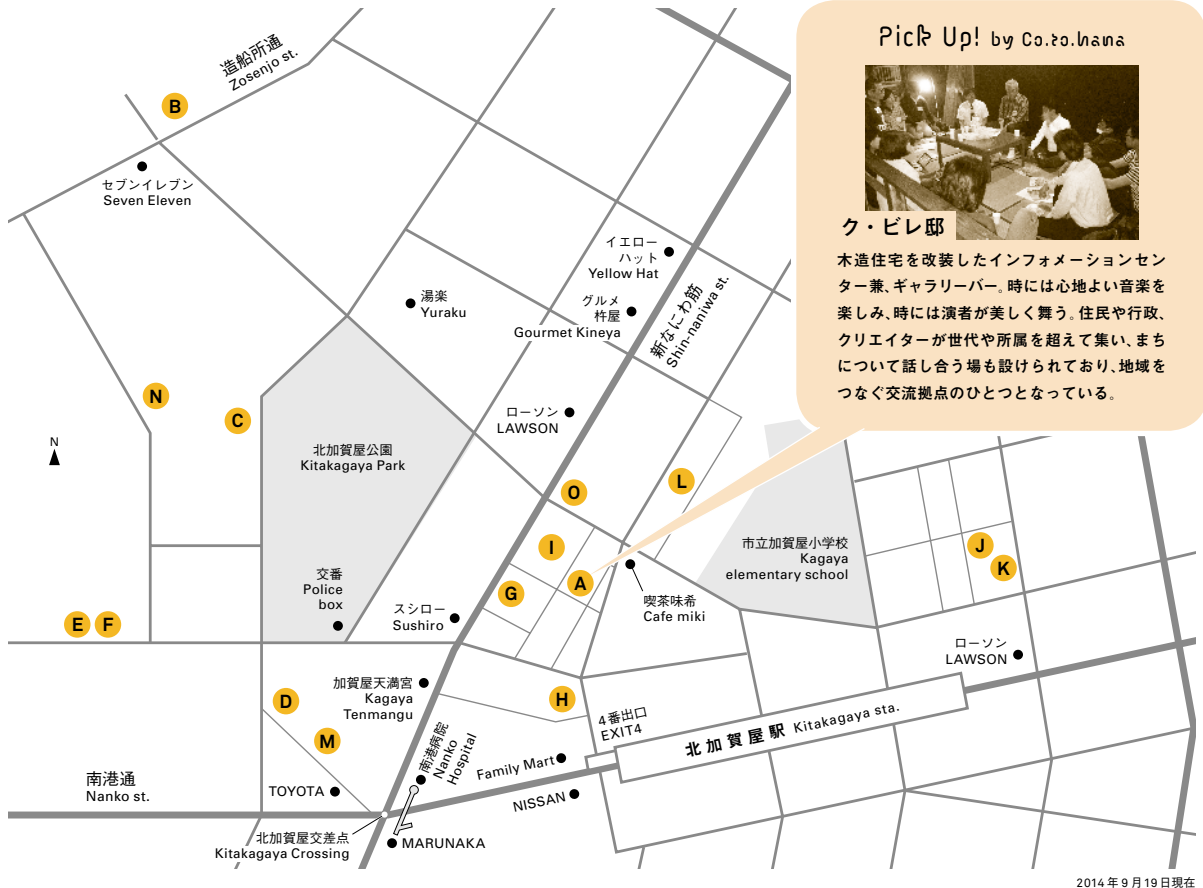


ゴミ捨て場のブロック塀に金属製のトビラがはめ込まれている。長さが邪魔だったのか、塀の高さに合わせて切断されている。工場の多い北加賀屋だからこそなせるワザ。このトビラに気づいた人の落書きもオシャレに見えてくる。

有佐祐樹（MAD荘管理人）
コーポ北加賀屋に住んでいます。グラフィックデザイナー。愛猫家。



おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信/ネットワーキングの支援を行っています。



Viewpoint from Overseas

再生と芸術

北加賀屋のような空間活用を見て特に思い浮かぶのは、シドニーのコカトゥー島や港の再生。100年もの時を経て、現在シドニー・ビエンナーレのメイン会場として活用されています。忘れられた都市の創造的な再生は、北加賀屋にエキサイティングな未来をもたらすのではないのでしょうか。

ローレン・ハドラー
KYOTOGRAPHIE パブリック・プログラムディレクター、アートコンサルタントとして豪日交流の活動に携わる。



- [A] ク・ビレ邸 [インフォメーションセンター] 北加賀屋2-8-8 quvillezthe.wordpress.com
- [B] クリエイティブセンター大阪(CCO)[複合アートスペース]
北加賀屋4-1-55 名村造船所大阪工場跡地 www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋[協働スタジオ] 北加賀屋5-4-12 www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室[アトリエ] 北加賀屋5-2-31 www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 芸術中心●カナリヤ条約[アートスタジオ] 北加賀屋5-5-35 canaryconvention.wordpress.com/
- [F] 鞆蔵館[シェアハウス] 北加賀屋5-5-35
- [G] AIR大阪(アーティスト・イン・レジデンス大阪)[宿泊施設] 北加賀屋2-9-19 airosaka.com/
- [H] Co.to.hana(コトハナ)[デザインオフィス] 北加賀屋2-10-21 www.cotohana.jp/
- [I] 隠れ屋1632 秘密基地[手づくりメカネ&アクセサリー] 北加賀屋2-8-9 www.kakureya1632.com/
- [J] CAFÉ DJANGO[自家焙煎コーヒー店] 北加賀屋1-6-28 カガ第2ビル1F www.django.jp/
- [K] 騒ギニ乗ジテ[ギャラリー・バー] 北加賀屋1-6-1 カガ第1ビル1F sawaginijoujite.jimdo.com/
- [L] 北加賀屋みんなのうえん①[コミュニティファーム] 北加賀屋2-4-6 minnanouen.jp/
- [M] 北加賀屋みんなのうえん②[コミュニティファーム] 北加賀屋5-2-29 minnanouen.jp/
- [N] MASK[MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA][オープン・ストレージ] 北加賀屋5-4-48
- [O] b(フラット)Gallery[カフェ・ギャラリー] 北加賀屋2-3-17 flat9gallery.wix.com/flatgallery

※ご見学希望の場合は、事前に Web などで情報を確認いただくか、各施設にお問い合わせください。



リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方

全国初の都市再生推進法人の取り組み

服部 彰治

Shoji Hattori



東京生まれ。北海道東海大学芸術工学部建築学科(旭川校舎)出身。札幌大通まちづくり株式会社取締役統括部長として、大通地区の再生に向けた取り組みを展開。日本全国初の都市再生推進法人として、特措法を活用し、道路空間活用及び道路環境維持向上を実践中。経済産業省タウンプロデューサー、地域活性化伝道師。

＞服部さんが選ぶ次のコラムニストは…

左京泰明氏(NPO法人シブヤ大学学長)

力強さと、優しさと、チーム力と、すべてを教えてください！(服部)

札幌大通まちづくり株式会社(以下、大通まち会社)が設立され、今年9月で5年が経つ。設立当初より6つの商店街と連携した取り組みをはじめ、まちに貢献し、収益を確保する事業を実施してきた。収益事業によって、利益が得られた場合には、大通スマイルキャンペーンなど、まちが一体となる取り組みに対して再投資を行ってきた。さらに言えば、現在7名のスタッフが専従的にまちづくり事業へ従事していることがまちへの大きな再投資になっていると思う。エリアマネジメントという言葉がどこでも言われるようになってきているが、その実態はまだ明確ではないと思う。大通まち会社で実施している取り組みを通じ、自分は、まちへの再投資と新陳代謝を生み出す取り組みこそ、まちに必要なエリアマネジメントだと考えている。民地側の建替えやリノベーションなどもまちの新陳代謝を生み出す重要な取り組みだと思うし、また、新たな街路空間を生み出して行くことも、そのまちの個性を発信していくためには大切な取り組み

だと思う。また、整備された後にどんな活用を行うか、というプロセスではなく、どんな活用や運用をしていくのか、それを前提に必要な投資を行い、効果を上げていく検討が必要だと感じている。ビルの遊休不動産を活用し、現在30組以上が入居している「さっぽろ大通コワーキングスペースドリノキ」、都市再生特別措置法を活用し道路上に食事購買施設を設置、運用する「大通すわろうテラス」、歩行者天国の管理や警察・市・商店街と連携して取り組んでいる自転車対策アクションプラン、サイクルシェアリングを実践している「ポロクル」との連携などを行ってきた。また、今は、歩行者を優先し、自転車走行帯と公共交通機関や一般車両などを再編成する道路再配分など、速い交通と遅い交通の在り方を検討しはじめています。もともと日本には、「公」「共」「私」という空間構成があったと思う。「共」は「私」の人たちが管理活用することで、魅力的な場になっていた。改めて、今、「私」側から「共」に対してアプローチするときが来たと思う。

公の場で私的な発言をすること

橋本 裕介

Yusuke Hashimoto



1976年福岡生まれ。舞台芸術プロデューサー。大学在学中から演劇活動を開始、2003年橋本制作事務所を設立、演劇・ダンスのプロデュースを手がける。2010年よりKYOTO EXPERIMENT(京都国際舞台芸術祭)プログラムディレクター、2013年より舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)理事長。2014年よりロームシアター京都開設準備室、プログラムディレクター。

＞橋本さんが選ぶ次のコラムニストは…

斎藤貴弘氏(弁護士)／Let's DANCE 署名推進委員会共同代表)

音楽・ダンス文化を守るため風営法の改正に動く、クールな外見とは対照的な熱血弁護士。(橋本)

私は発足からの5年間、京都の国際舞台芸術祭「KYOTO EXPERIMENT」でプログラムディレクターとして携わっています。多くの印象的な作品と出会ってきましたが、今回は昨年の印象的なプロジェクトを紹介したいと思います。美術家・演出家の高嶺格は「ジャパン・シンドローム」と題するシリーズをこの芸術祭で2011年から展開しています。このシリーズで彼は、震災後と原発事故を経て生じた日本社会の変化について、発表の形態を変えながら作品化させてきました。2013年は「ベルリン編」と題し、彼はアーティストインレジデンス先のベルリンで次の作品の構想を練りました。離れた場所から見た日本は、あまりに大きな状況を前に人々が互いに意見を交わすことを諦め、それぞれに都合の良い立場でものを見るような視野の狭さ、いわば社会が徐々に分断されていくような姿に映りました。ですから、もはや状況を描く「作品」では意味が無い、人々を巻き込む「アクション」にしよう、そう彼は考えました。どこでやるか？

選んだ場所が京都市役所前広場。その場をあたかもダンスフロアに変え、行き交う人々の足を止め、市庁舎の壁面に踊る人々と高嶺からの質問を投影しました。Twitterと連動し、あらゆる人が質問に好きに答え、それも投影されたのです。祭の一体感と多様な人が集っている違和感、それらが同居する奇妙な空間が生まれました。私的な意見は私的な場所で言え、という見解がありますが、だとすれば公の意見はどうやって構成されるのでしょうか？公が社会の多様な構成員の存在から成り立つとすれば、個々の構成員の意見が顕在化しなければ公の意見も構成されないはず。ですから、公の場所でこそ私的な意見を述べる必要があるのではないのでしょうか。さらに言えば、私たちはそうやって公の意見を形成する責任が、構成員としてあるはず。『公とはこういうものだ』と予め誰かに勝手に決められるようなものではない、そのことを強く喚起させる出来事でした。

TOPICS from CFCO

おおさか創造千島財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

NEWS

01 『Open Storage 2014 一見せる収蔵庫』開催

近年では、世界中で大規模な展覧会が多数開催され、アーティストの大型作品発表機会が増える一方、作品の制作／保管場所の確保が難しく、作品規模の縮小や廃棄を余儀なくされるなど、創造環境面での課題があります。このような状況の改善に向けて、おおさか創造千島財団は、2012年より、鋼材加工工場・倉庫跡を大型アート作品の収蔵庫として活用するプロジェクト、MASK [MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA] (p5: MAP [N] 参照) を進めてきました。これまで収蔵した作品群の初となる一般公開展示「Open Storage 2014 一見せる収蔵庫」を開催します。会期中、公開制作やアーティスト・トークなどイベント開催も予定。

会期：11月8日(土)～11月24日(月・祝) ※金・土・日曜・祝日のみ開場
会場：MASK [MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA] 出展作家：宇治野宗輝、金氏徹平、久保田弘成、やなぎみわ、ヤノベケンジ 企画協力：木ノ下智恵子(大阪大学CSCD) 主催／企画運営：おおさか創造千島財団 お問い合わせ：found@chishimatochi.info Web: <http://www.chishimatochi.info/found/>



photo: Yuki Moriya
『Open Storage 2014』準備風景

02 『北加賀屋みんなのうえん祭 2014』開催

3回目を迎える「北加賀屋みんなのうえん祭」は、農や食、アートをテーマとした「農ある豊かな都市の暮らし」を提案するイベントです。今回は、劇団子供鉦人の益山貴司氏を迎え、「みんなのうえん体操」を初お披露目。地域住民や農園参加メンバーと共に考案したオリジナル振付と音楽による、農作業のための準備体操です。当日は子供鉦人メンバーも加わり、造船所跡地を舞台に参加型パフォーマンスを行う予定です。ほかにも、こだわりの有機野菜のマルシェやケータリング、アーティスト考案のワークショップなどさまざま。豊かな食と農のある暮らしを体感してみませんか。

開催日時：10月19日(日)11:00～16:00 会場：クリエイティブセンター大阪(CCO)、北加賀屋みんなのうえん①、② 主催／企画運営：NPO法人 Co.to.hana、北加賀屋みんなのうえん運営事務局 助成／企画協力：おおさか創造千島財団 Web: <http://minnanouen.jp/> 同時開催：國府理追悼展「Parabolic Farm」10月19日(日)～11月16日(日) ※金・土・日曜・祝日のみ開場



北加賀屋みんなのうえん祭 2013の様子

ACTIVITY 2013年度 スペース助成／創造活動助成

01 姉妹都市提携25周年記念事業

親善大誌『小豆島と茨木』『茨木と小豆島』

<http://www.art-ibaraki.com>

瀬戸内国際芸術祭で話題の小豆島町と、ヤノベケンジや名和晃平のモニュメントが建つ茨木市が、姉妹都市提携25周年記念事業として、親善大使ならぬ親善大誌『小豆島と茨木』を創刊。双方の町が交互に発行元となる！という史上初の発行形態をとりながら、秋には第2号となる『茨木と小豆島』を発行予定。



文・河上友信(茨木芸術中心代表／GLAN FABRIQUE inc. 代表・空間デザイナー)

02 contact Gonzo、志賀理江子、梅田哲也3者による東北ロードツアー

<http://contactgonzo.blogspot.jp/>

方法論のまったく異なる3組のアーティストが青森県・下北半島を旅し、目撃した風景や人のインタビューを冊子にまとめた。旅の先々で出会った人物たちの言葉は、いろいろな角度から異なる場所で生活する僕たちの日々にも影響を与えはじめています。2014年3月には、大阪・中津で冊子発行を記念した展示も開催。



photo: Yuya Tsukihara
文・塚原悠也(contact Gonzo)



北加賀屋の発明家たち

2013年1月、北加賀屋に発足した「FabLab Kitakagaya」。必要なものを自分たちの手でつくる、という思想のもと生まれた市民工場の活動を取り上げます。

File 3

illustration: Rie Mochizuki

Layer Zaisu Projectの 加藤昌和、森本康平

FabLabを巡り「モノ」の新たな可能性を探る加藤さんと、FabLabメンバーの森本さん。彼らはラボのメンバーとともに「Layer Zaisu」づくりのワークショップを行っている。レイヤー状に木材を重ねて椅子をつくる、Jens Dyvikによるデザイン「Layer Chair」をソースに展開。「アジア圏の身近な動作＝座るをデザインに取り入れることで、普段の生活に創造性をもたらすきっかけとなれば」と語る加藤さん。「個人制作では知り得ない、さまざまな技術や発想を共有できた」と森本さんが話すように、個人からプロジェクト単位での創作へ、これからのものづくりが見えてきた。

Layer Zaisu Project
CNCルーターで座椅子のパーツを切り出し、つくるワークショップ。今年6月からスタート、7月に品評会が行われた。

Layer Zaisu Project 成果物 《Layer Zaisu》



▼作品のオープンデータが下記サイトよりダウンロードできます！
<http://nomad-japan.sblo.jp/article/102133347.html>



Comment

押して引いてを繰り返しながら地球上に広がっている、オープンデザインの潮流。デザインの共有、改良、製作がごく身近な行為になりつつあるなか、共に実験できる学びの場や、間を行き来するノマドの存在がそれらを多様に進める。適正でちょうどいいデザインとは何か。まず他者から学び、身体固有性や地域環境に心を配りながら、自己の考えを形にする。そこから、その問いへの旅ははじまる。

津田和俊（大阪大学助教、FabLab Japan Network）